



Title	文化的景観の四次選定に向けた取り組み
Author(s)	西山, 徳明
Citation	アイヌの伝統を基層にした多文化な景観：北海道平取地域の文化的景観に関する論説集, 22-23
Issue Date	2024-03-29
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/92876">http://hdl.handle.net/2115/92876</a>
Type	report part
File Information	ronshu_biratori (13).pdf



[Instructions for use](#)

## 文化的景観の四次選定に向けた取り組み

西山徳明  
北海道大学観光学高等研究センター 教授

平取町の『アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観』の重文景選定は、日本に制度ができた最初期(平成19年7月)であり、この際に今日につながる価値付けのストーリーの枠組みが示された。それは、アイヌの人々が畏れ大切にしてお手をつけなかったポロシリやチノミシリ等の山容や草木からなる自然景観、すなわちユネスコ世界遺産の作業指針が規定する「関連する景観」を基盤・背景とし、そこに継承されてきているアイヌの居住がつくり出したチャン等の「化石の景観」とコタン等の「有機的に進化する景観」、そして近代開拓による農林業や牧畜の暮らしが造出した生業景観(有機的に進化する景観)が併存し重層するというものである。筆者の理解では、重層するというよりむしろそれらがインテグレートされた価値であり、現代の生業との関係のみでは説明できない価値を評価しようとしているように見える。しかし実際に一次選定時に保存対象としてリストアップされた景観構成要素は、一部の森林と河川、放牧地と単体の学校跡地や歴史的建築物に限られ、人の営みが見える居住地や農地は含まれなかった。

それに続く2次(平成28年3月)、3次(平成30年10月)選定でも、対象は上記要素の一部を充実させる国有林と民有林の選定にとどまった。そのため、次回四次の追加選定に先だって、文化庁より「価値を説明する全ての要素を含むこと」、そして「(範囲としての)平取の文化的景観の最終形を示すこと」が求められた。ただこの間、平取町も手をこまねいていたわけではない。3次選定調査では、河口域と本流上流域(いずれも日高町に属する)を除く沙流川流域の大半を占める平取町全域を将来的に文化的景観に選定することを視野に入れた全町域の景観特性および景観構成要素分布の把握調査をおこなっている。

結論としては、次回四次選定において全町域を選定対象とすることは現実的ではないと判断し、全町調査から得られた知見を用いて、いくつかの考え方を定め、選定候補地を決めた。その考え方の基本は、①上記の「関連する景観」やイヨマンテの「送り」の儀式に代表されるようなアイヌの自然観や世界観(コスモロジー)を理解できる文化的景観のストーリーを示すこと、②こうしたコスモロジーが展開する領域を、平取町内にほぼ収まる、ポロシリの麓に源を発し海に注ぐ「額平川」と「沙流川中・下流域」をつないだ河川の集水域を用いて説明すること、③その領域を構成するイウォロ(アイヌの伝統的な日常生活領域)の概念を現代の地域空間の中で再理解し、景観単位として用いること、④近代開拓以降の農地や牧草地は遷移の過程にあり、その土地利用を固定的に評価することが難しいため、むしろその根底にある河床や河岸段丘等の地形を価値づけて保護することが望ましいとするものであった。調査報告書では、この考えに基づいて価値説明のストーリーを加筆・補強し、その価値の展開する市街地や集落域も含む一定範囲を、現時点における平取町の文化的景観の最終形として示した。現在は関係者の同意を取得するための現地説明会等の段階にきている。

四次選定の結果がどの範囲となるのかは予断を許さないが、上記の全町調査によって、平取町全域の文化的景観としての価値が理解できた。さらには日高町に属する河口域や上流域も含めた本来の沙流川全流域の文化的景観の価値や魅力を地域内外の人たちで共有し、世界にも発信していくことが、アイヌ文化振興の大きな展開につながると筆者は信じている。



写真 荷負本村から見た額平川流域に広がる農地・山林とポロシリ